

# 幻想の紅魔

エルナ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何処かに突如現れる赤い、血に濡れたような真つ赤な館を見たことがあるだろうか？

見つけてしまえば即座に逃げることを勧める。

間違ってもその中に入ってはいけない。

本来そこに居る筈の無い化け物が居るからだ。

もし間違つて入ってしまったら誰にも会ってはいけない。

その館に盗みになんてもつての他だ、地獄を見ることになるだろう。

火桜さん <https://syosetu.org/?mode=user&uid=253815>との合作です！

交互に書いたものを更新していきます！

# 目次

第1話	プロローグ	1
第2話	クロフィの日常	8
第3話	すかれーつとなふたご	14
第4話	増加と減少	21
第5話	記憶と狂乱	31
第6話	吸血鬼(ヴァンパイア)ハンター	42
第7話		50

## 第1話 プロローグ

さて、現在はコミケにいった帰り。

いや〜やつぱりコミケは混んでたなあ。

並ぶことさえも楽しみの一つになりかねない。

イヤ、それは無いか。

さて、今回は本当に豊作だった！

フランちゃん&amp;amp;レミリアのスカートレット姉妹の同人誌があるなんて！

しかも神作画で、ストーリーも面白い！

イヤー豊作豊作。早く家に帰って観賞しなければ!!

俺はそんなルンルン気分で家に帰っていた。

それがいけなかった。

信号が赤だったことに気がついていなかったのだ。

まあ、そこからは察しの通りだと思おうが俺は車に敷かれて死んだ。

「俺が死んだ理由は解った。それで、ここは何処だ？　そして、あんたは誰？」

実は言うのと死んだあの後何故か不思議な空間に居て、目の前にヨボヨボの爺さんが居た。

「いやはや、最近の若い奴はいかんのう、話を急かしすぎるわい。ここは転生の間。お主は見事に死んで転生する権利を掴み取ったのじゃ」

……………転生？

転生ってあの転生か!?

ラノベでの定番！　あの異世界転生なのか!?

う、嘘だろ!?

「どうした？　嫌かの？」

「……………なわけ」

「うん？　何だって？　最近少し耳が遠くてのおく

聞こえづらいのじゃ。もう一回言ってみて？」

「嫌な訳が無いだろおお!？」

嫌な訳が無い!!

だって転生だぞ?! 異世界転生だぞ!?

オタクにとつて嬉しく無いわけがあるか!?

否! 無い!!

「ぶわっ! い、いきなり大声を出さんといってくれ。びつくりするじゃろ」

何やら文句が言っているが声は聞こえない無視だ無視。

「はあ、本当に最近の若い奴は。こちらもさっさと終わらせたい。早くするぞ。転生する際の要望とか無いかの? あるなら少し位なら聞いてやるぞ? 行きたい世界とかな」

なん、だと? ま、まさか自分で行ける世界を選べるのか!?

それなら1択しか無いだろう? 俺の行きたい世界何て1つしかない!!

「俺を、俺を! 東方projectのスカレット姉妹の兄にしてくれ!!」

「ほう、東方projectのスカレット姉妹の兄になりたいと。それにしても何故じゃ? 他にも沢山の世界があるじゃろう? しかもそこまでの設定を注ぎ込むとなるとチートは期待せん方が良いと思うぞ?」

「何故かって? それは愚問だよ爺さん。だって東方projectの世界に行ってスカレット姉妹の兄に成ってみろ? 毎日フランちゃんやレミリアにお兄さまって呼ばれるんだぞ! 天国じゃないか!」

これ以上に何を求めるものがあるというのだ!!」

そう、東方projectの世界に行つてスカレット姉妹にお兄さまと言われる。これが俺の念願の夢だったのだ。

それがやつと叶うんだぞ? 最高過ぎかよ。

死ねるぜ? 俺はな!

「そ、そうか。わかった。ならお主を今から東方projectの世界へ転生させる。準備は良いか?」

「ちよ、ちよちよ、ちよつと、ま、待つて! まだ心の準備が!」  
し、深呼吸だ。

ふう、こ、これ夢とかドツキリじゃないよね!!

そうだったらマジで許さないからな!

「それではいくぞ」

えー! も、もうなのか!?

「それ!」

「ん? 何も起きないんだけど?」

「ほれ、下、下を見てみる?」

し、下?

そつと下を見てみる。そこにはポツカリと先が見えない大きな穴が……………穴!?

「お、おい! これ! 落ち、ぎやああああ!! 死ぬー!! お前マジで許さないからなあ!!」

いやあああああ!!」

「さらばじゃ、年若き青年よ。たくましく生きるのじゃ」

う、うくん。無事に転生出来たのか?

とりあえずあのじいさんはあつたらしばく。

とりあえず目を開けたいんだけど?

あれ? 真っ暗? 何も見えない。

な、何だこれ!?! そ、そういうえば周りも何も聞こえないし。

体も動かせない!!

ななななんなんだこれは——!!

「オギヤ——!!」

こうして、これが俺が産まれた日だった。

数十年後

「あのときは大変だったのよー? 貴方つたらなかなか泣かないものだから死んでしまったものだとばかり」

「お母様その話はもう何度も聞きました。その事については俺が悪かったです。ですからもうその話は止めてください」

「俺?」

「う、ぼ、僕が悪かったです」

この綺麗な金髪の女性は今世での俺の母だ。

名前はアイチア・スカーレットだ。

それはそれとして。やはり今世の母は厳しい。

言葉使いが悪いと叱られてしまうのだ。他にはテーブルマナーや歩き方、その他もろもろ。

貴族の嗜み？ 吸血鬼のですか？

まあ、スカーレット家だからなあ。

それでも、ちゃんと優しいし何てつたつて美人！

しかもたいそう大きな物をお持ちである。

いやあこんな美人を家の父は何処で捕まえてきたのやら。

さて、そんなこんなで俺が産まれてから数十年。

吸血鬼として産まれてから時が経つのが速く感じる。

もう何年生きたのかさえも解らなくなってしまった。

そんなことを気にしても仕方ないし、しょうがない。

そんなことを思っていると後ろの方から優しげでも少し圧がある声が聞こえてくる。

父かな？

「ハハハ、君もそこまで矯正しなくても良いんじゃないか？ 子供は伸び伸びと成長しないとね」

やはり父のようだった。

父もかなりのイケメンなのだ。

父の名前はソギト・スカーレット。

どういう意味合いなんだろうね。

因みに黒髪だ。

だがやはりイケメンには美人が付いてくるのだろうか？

そんなイケメン、美人の血を引き継いでいる性なのかは解らないが今世の俺はかなりの美形だ。

髪の色は吸血鬼らしい？ 紅色だ。

因みに名前はクロフィ・スカーレットだ。

格好いいだろ？ 由来？ さあ？ 両親に聞いてみなければ解ら

ないな。

「はあ、貴方がそんなだからクロフィがヤンチャするんでしょう！  
どうするの？ この子は次期紅魔館の当主。ちゃんとした言葉使い  
が出来なくてはどうするのですか!! 痛ッ！」

「ああああ、ほら、騒ぐからお腹の子の為にも今は安静にしてなさい」  
実は言うとお母のお腹の中には二人目の子が居るのだ。  
お腹の中に居るのは恐らくレミリア・スカーレット。  
紅魔館のスカーレット姉妹の姉にあたる人物だ。

「そうだよお母様。今は安静にしないとね！」  
さて、これみよがしに少しストレスを発散してみる。

「お前は黙ってなさい」  
む、感じ取られてしまったか。

どうやら父には隠し事が出来ないようだった。

「はーい」  
誠心誠意を込めて返事をする。  
嘘だ口だけだった。

「返事は伸ばさない！ う、痛い」

どうやら母には解らなかつたようだが口調を注意されてしまった。

「大声を出しちやいけなよ。ほら寝室で休もう」

「そうね、少し休ませてもらおうかしら」  
さて、レミリアは何時産まれるんだろうか？  
やはり楽しみだ。

何故って？ 原作キャラだぞ？

でも、少しは親の心配はしようとは思う。

「お前も今日はもう遅い。子供は寝なさい」  
おっと、もうそんな時間か。

確かにもう12時はまわってるな。

「はい、おやすみなさい」

とりあえずおやすみの言葉を言い部屋を出る。

まあ、吸血鬼だから寝ないんだけどな。

父に乗ってみる。



「ああ、おやすみ」

だから寝ないんだけど。

父はボケてるのかな？

「イヤ、ツッコんでくれよ」

「あ、ボケだったんですね」

どうやらボケていたのではなくてボケをかましていたらしい。

父にしては少し珍しい。

その深夜。

俺は結局寝た。

レミリアやフラン達が産まれて幻想郷に行ったら夜行性では無くなるかもしれないからな。

そのための練習なのだがこれが中々うまく行かない。

なので寝る練習をしていたのだが俺は突然起きた。

起きたというよりは起こされたの方が正しいかもしれない。

突然真夜中に人の悲鳴が聞こえた。

呻くようなそんな声だ。

現在こんな悲鳴を叫ぶ人物は一人しかいない。

母だ。

このような呻き声が聞こえてきたということは、まさか産まれる？

俺は慌てて自分のベットから飛び降り部屋を出た。

呻き声が聞こえる部屋の前まで何とか辿り着いたのだがそこに居

たのは母ではなく父だった。

「父さま、はあはあ。お、お母様の様子は！」

「今が踏ん張り所だ。中には入るな」

やはり出産には立ち会えないか。

その後何秒、何分、何時間たったのか。

吸血鬼になって時間の流れが速くなったと思っていたのだがそんなことは無かったようだ。

一秒一秒が悠久の時間に感じられる。

どれ程待ったのかは正確には解らないがやっと部屋の中から赤子

の泣き声が聞こえてきた。

「と、父さま。う、産まれたよー!」

俺は喜びが抑えきれずに父に叫ぶ。

そして本当に産まれたのか他の人に確認するように。

「ふう、う、産まれたな」

どうやら父も心配していたようで自然と胸を撫で下ろした。

その後産まれた赤子には吸血鬼の象徴たるコウモリのような翼と鋭い八重歯が付いていた。

紫色の髪色をした女の子に付けられた名前はやはりレミア・スカーレットだった。

## 第2話 クロフィの日常

草木も眠る丑三つ時。

木々によつて星明かりすら届かない森の一本道にて異様な光景が広がっていた。

道を塞ぐように腕を組み仁王立ちするのはあどけなきの残る紅色の髪の少年。

その背に背負うコウモリのような羽は吸血鬼の証。

血のような鮮やかな赤色の瞳から冷たい視線の先を見るとそこには人間ならば恐怖し逃げ出す異形の怪物達の群れ。

しかし、その異形の怪物達の群れは1匹残らず地面に膝を着くか、地面に倒れ付していた。

少年に向けるその怪物たちの視線には一様に恐怖のみがあった。

その怪物達の中で一際大きな体を持ち、群れの長である妖怪は——だが他の妖怪達と同じく地面に膝を着き、少年に恐怖の眼差しを送りながら、どうしてこうなったのかと回想した。

彼は紅魔館周辺の妖怪達を纏める長であった。

彼は部下と共に人間を襲い、畏れを集めていた。

だがその成果は芳しくなかった。

何故ならば近くに有名かつ強力な妖怪である吸血鬼の一家があったからだ。

彼にはそれが苛立たしかった。

いや、彼の部下達もそうだった。

自分達より人間を襲っていないにも関わらず、自分達以上に人間達から畏れを集めていることが。

故に彼は部下を集め、紅魔館を襲撃することに決めた。

そして、殺した吸血鬼達の首を人間に見せつけることで自分達が吸血鬼なんかよりも恐ろしい存在だと知らしめようとしたのだ。

その結果がこれだ。

彼等とて吸血鬼が容易い相手とは思っていないかった。

だが吸血鬼は当主とその妻、後は100年も生きていない若造しか



「はあ……」

少年——クロフイ・スカーレットは生きているものいなくなったその場でそつとため息を吐いた。

異形の怪物であるとはいえ、生物を殺してまったく罪悪感がない。その事に複雑な思いを持つてため息を吐いたのだ。

転生して吸血鬼になってから精神構造が変わったのか妖怪達の死体を見ても何も思わない。

人の血すら平然と飲めてしまう。

しかしまあ、妖怪達は紅魔館を襲おうとしたのだ。

必然的にレミリアを襲おうとしたわけだ。

「うん、やっぱ死んで当然だわ。というかもっと苦しめて殺すべきだったかもしれない」

シスコンここに極めりである。

こんな奴に殺された妖怪達に憐憫の念を抱かずには居られない。

踵を返して、紅魔館に帰るために歩き出したクロフイの頭には最早つuisつき殺した妖怪達のことはすっぱ抜けレミリアのことで頭がいっぱいだった……。

クロフイの妹——レミリア・スカーレットが誕生してから早数年が経過していた。

その間当然と言うべきかクロフイはレミリアを溺愛した。

レミリアに初めて「おにいさま」と呼ばれた時は心臓を撃ち抜かれたように崩れ落ちた程だ。

「でへへ」と擬音の聞こえてきそうならしのない笑みを浮かべて幼女レミリアを構う様はクロフイが少年の見た目だから良いもの、そうじゃなければ第三者が見れば通報ものである。

兄妹なので問題ないといえはないのだが……。

さて、そんなクロフイもまさか一日中レミリアを愛でている訳では無い。

彼がスカーレット姉妹の兄に転生した事で本来当主になるレミリ

アではなくクロファイが当主になる。

そのため幼い頃から様々な教育を施されている。

加えて戦闘能力的に問題ないと判断した現当主——ソギト・スカレットからこのような仕事を任せられることも珍しくなかった。

クロファイは転生前の日本での知識があつたが天才という程でもなかった。

元々が日本でぬくぬく暮らしていた凡人なのだからしょうがない。身体能力と魔力は化け物クラスだがそれは吸血鬼の特性であつてクロファイの個性という訳では無い。

吸血鬼の中では高い方のようなだがそれでも個人差の範囲だ。

加えてクロファイには魔法への適正が一切なかった。

それを知った時、クロファイは膝を着き絶望にくれた。

男の子は誰もが1度は魔法に憧れるものである。

だが、チート能力がなかった訳では無い。

それが彼の「程度の能力」——「ありとあらゆるものを抑制する程度の能力」である。

この能力はかなり万能で、相手の攻撃の速度や威力を下げるのはもちろん、相手の能力を弱くしたり、相手の魔力や妖力などを小さくしたり、身体機能を抑えることすら可能だ。その気になれば、太陽の光を抑えたり、地球の自転、公転を抑えることすらできる。……凄まじいエネルギーを消費するだろうが。

ここまででお分かりの通りこの能力で先の妖怪達の動きが封じられたのだ

……全員の力を一律で下げていたので力の強かった長の火事場の馬鹿力によって攻撃を仕掛けられる事故はあつたが。

かなりチートな能力である。しかし、この能力にも弱点はある。

まず1つに、どんなに頑張つても、0にすることはできないのだ。故に相手の動きを抑えても、少しづつ動かし、攻撃の威力をなくすことはできない。……限りなくゼロにすることは可能なので誤差の範囲だが。

そして、2つ目だがこれはかなり厄介で、知覚できるモノにしか無

理だと言うことだ。つまり、地球の裏にいる奴の力を抑えることはできないし、なんらかの手段で姿や気配を消した相手の力を抑えることはできないのだ。

つまり、不意打ちに弱い。が、余程の達人でもない限り、吸血鬼のクロフィの不意を付けるものは居ないだろう。

この能力を使えば戦闘が成立しない。

だが、彼の父のソギトはそれでも戦闘訓練をさせた。

クロフィはこっちが虐殺するか不意をつかれてやられるかの2択なので必要ないと思ったが前世で調子に乗ってやられたアニメや漫画のキャラを沢山知っていたので大人しく従った。

「ただいま〜」

「あ、おかえりなさい、おにいさま〜♪」

紅魔館に帰宅したクロフィを迎えたのは羽をパタパタさせながら抱きついたレミリアだった。

にへらく、だらしない笑みを浮かべてクロフィはレミリアを抱き返した。

「やあ、レミリア。いい子にしてたか？」

「うん！ れみりあ、いいこにしてたよ！」

「そつかく、偉いな〜」

デレデレと気持ちの悪い笑みを浮かべ続けるシスコンに話しかけるものが1人。

「……あのな、一応私もあるんだが」

「おや、お父様。いらっしやったのですか。気づきませんでした」

「……お前、やっぱり性格変わってないか？」

ソギトは半眼で自分の息子を見つめる。

「それで、襲撃に向かってきていた妖怪達はどうした」

「はい、皆殺しにできました。大したのはいませんでしたね」

レミリアの頭を撫でながらそう言うクロフィをソギトはじーと見つめる。

「……油断したなお前」

「イエ、ソナナコトゴザイマセン」

何故バレたし！ という内心を押し殺しつつ返した。

「……………」

「……………」

「……………」

「…………すみません、油断しました」

父の無言の圧力に耐えかね白状したクロフィにソギトは大きくため息を吐いた。

「あのなく、お前が怪我をすればアイチアやレミアアがどれだけ心配すると思ってる。もちろん私もな」

「…………返す言葉もございません」

「そもそも、お前は昔から詰め甘いところが——」

「そ、それよりお父様！ お母様の容態はどうですか？」

このままでは長つたらしい説教タイムに入ると感じたクロフィは慌てて、話題を逸らした。

ソギトは再びため息を吐いた。

「…………容態は安定している。後で顔を見せてやれ」

「分かりました」

容態とは、別に怪我や病気ではなく、再び妊娠したのだ。

恐らくフランドール・スカーレットを。

可愛い妹が1人増える。

その事実にはクロフィは再び気持ちの悪い笑みを浮かべてレミアアを抱きながらアイチアの部屋へと歩き出した。



### 第3話 すかれーつとなふたご

今日は晴天の空。普通の家庭ならば何というピクニック日和だ、とても言うのだろうか？

そんなサンサンと忌々しい太陽の日光が照りつける朝。ではなく、吸血鬼ならば当然夜。

夜の支配者何て呼ばれている位だからな。

真ん丸いお月様が出ている、というわけでもなく残念だが今夜は満月ではない。

そんな夜に俺は何をしているかというと……………

第2の妹と戯れている!!

そうレミリアに続きスカーレット家の次女フランドールが産まれたのだ。

フランの狂気？ そんなもの知った事じゃない。

これを見て見ろ？

「おにいさまー!!」

フランが彼方から此方に俺をお兄様と叫びながら俺へ向かって来る。

可愛い過ぎるだろ!!

そしてその可愛いさの元凶をそのまま抱き抱えてやるために腕を広げて待っているとそのまま胸に飛び込んでくると思いきや

……………

ズドンッ

「ウツ、な、ナイスアタック」

「ブハッ!! な、ナイスアタックって！ ブフツ！ ワハハハハハッ

!!!」

そのまま俺の腹にダイレクトアタックをかましてきた。

直前で能力で何とか威力を下げたが吸血鬼であるフランの突進なだけあってやはり痛かった。

何やら笑い声が聞こえる気がするが気のせいだろう。

こんな可愛い生物に狂気が宿るなんて、もし宿ったとしても俺はこ

の可愛い妹を愛し続ける!!

「イヤイヤ兄さんのその愛の方に私は狂気を感じるよ。流石シスコンは一味違うなあ」

フランが可愛いのは確定事項、もうそんなことは既に解りきっている事だ。

今更そこに着目しても俺の顔が気持ち悪い笑顔で満たされるだけだ。

フランが産まれた事によってこの紅魔館のスカレット姉妹が漸く二人共に揃ったのである。

つまりこの屋敷に居るスカレット家の人間は両親と俺たちスカレット兄妹だけだ。

そして、解っている人も居るだろうが先程からちよいちよい話に、というか俺の思考を読んでる人物が居る。

俺というイレギュラーがこの世界に居るせいなのかは解らないが、フランが産まれたとき双子だったのだ。

その双子の片割れがこの、クラン・スカレットだ。髪色は銀髪、容姿はどちらかという女の子寄りな顔をしている。

フランが銀髪になって、少し男の子っぽくなったという感じだ。「フーラーンー! 一応謝るときなー!」

「ぬぬぬ! くらんにいわれなくてもわかってるもん!」  
ほっぺを膨らますフラン! か、可愛い!

産まれて数年しか経っていない為かレミアの時と同様少し舌つたらずだ。

「デュフ、デュフフ」

おっとフランが与えてくる可愛さが笑いとして込み上げてきてしまった。  
「うつわ〜。デュフフとか本当に聞いたこと無いわ。流石に私でも引く」

というかコイツは何故こんなにフランと差があるんだ?

これは逆にあんなにハッキリと喋るクランの方がおかしい。

知能も産まれて数年とは思えない程にしつかりしてる。

フランに可愛さを取られた代わりに知能を手に入れたのだろうか？

「というか克蘭」

「どうした？ 妹大好き大好きすぎて何時か一線を越えかねないシスコン兄さん。少し自重した方が良いんじゃないの？ そのうちお兄様何て嫌い！ とか言われかねないと思うんだけど」

辛辣すぎないか!?

俺って一応兄なんだけど？ 兄なんだけど？

まあ、克蘭の悪口何て今更なんだけど。

後、フラン達がそんなこと言うはずは無い！ 多分

「はあ、何時もの悪口は平常運転みたいだな。それはそれとしてだ。お前のその一人称はどうにかならないのか？ そのうち本当に女だと思われるぞ？」

克蘭は自身の一人称を私で固定している。

容姿と相まって克蘭が女の子にしか見えない時があるのは困りものだ。

そもそも男で一人称が私なのは昔から知能が働く丁寧口調の奴だかって決まってるんだよな。

宇宙の帝王フリー○様とか。

「はあ、だってこうしないとガミガミうるさいし。長年こうだから他の一人称は慣れないし。」

だからどうにもならないしどうかしようとも思わない。そんなに気になるなら兄さんが母さんとレミリアに言ってきて。まあ妹大好きお兄様と親の前では真面目ちゃんな兄さんがあの二人に言えるかと考えれば無理だと思うけど」

「イヤ、正直あれは俺にも止められない。どうしてあんなってしまったんだろうか？ レミリアの育て方は間違ってる。毎日ちゃんと遊んだり愛情を毎日注いでいたというのに」

「イヤイヤ、そこじゃない。あれじゃない？ 女の子みたいな男の子が産まれたらどの親もあなるんじゃない？」

「そんな物なのか？ でもあれでも俺が産まれた時は規律とかマナー

とか厳しかったんだけどな」

「それは兄さんが次期紅魔館の当主だからじゃない？ あと顔もイケメンだからそんなことなかったんだろうな。羨ましい。レミリアと母さんは許さない」

自身の姉を呼び捨てにするのは止めた方が良いと思うんだが。

あれでもクランとフランの前では立派なお姉様を頑張っている訳だし。

何にしろ俺からしたらレミリアも可愛い妹の一人だがな。

クランが可愛いかと聞かれれば悩みものだが。

どちらかというと同年代の友達と接している感じだ。

前世に仲が良い友達何て殆どいなかったけど。

そんな風に弟と戯れている(?)と何やら不穏な気配を感じた。

まさか、敵か!?

イヤ、この気配は？

「クラン！ 逃げろ!! 今すぐに!!」

「まさか!?! ヤバイ！ 私は逃げるから!! 奴等には絶対に喋らないでくれよ!!」

お、おお。何度も繰り返し同じようにされているからか逃走体制へ移行するのが速い。

だが

「すまない、もう遅かった」

もう既に奴等はそこに居た。

流石吸血鬼。気配も無しに高速でクランの背後に忍び寄る。

音も無しにどうやってドアを開けたのだろうか？

ドアの方をチラリと見てみるが開いた形跡は無い。

もしや窓から入ってきたのか？

俺のプライベートは無いのか？

「ふえ?」

「みーつけた。さあクラン行くわよ！ まだまだ着るものが沢山あるんだから！」

年の差か、やはり産まれてまだ数年しか経っていない吸血鬼が産ま

れて数十年も経っている吸血鬼には力と体力では勝てない。そのため背後から克蘭がレミリアに羽交い締めにされても抜け出せないで居た。

「離せー!! 毎度毎度言ってるのに! 私は男だって!! イヤアアア!! ハツ!? ふ、フランと一緒に居ないと! ふ、フランは兄さんと一緒に居たいよな! な!?!」

どうにかして逃げたいのかフランに助けを求める克蘭。

一応アイツ、フランの兄なんだけどな。

妹に助けを求めるってどうなんだろうか?

「うくん、どうしよっかな?」

フランも助けを求めているという事が幼いながらも解っているのかこれ見よがしに嫌がらせをする。

こんな小さい頃から男を手玉にとるなんて! 恐ろしい子!

それでもフランはやっぱ可愛い。

自然と頬が綻ぶ。

でも俺的にはフランが俺と一緒に居たいと言ってくれる方が嬉しかったりする。

まだフランとそこまで今日は遊んでないし。

「フラン?」

「なくに? おかあさま?」

ふむ、今日はどうやらフランとはもう遊べないようだ。

少し、イヤ、大分残念だ。

「フランも行くわよね?」

「……………はい」

「そ、そんな。こんなのあんまりだあ! 兄さん助けてえー!」

「う、うくん。頑張ってくれ」

「うわああああああ——ん!!」

ズルズルと襟をレミリアに掴まれて部屋から悲鳴をあげながら退場していく克蘭。

さらば克蘭。

遅しく生きていつてくれ我が弟よ。

「さて、誰も居なくなりましたよ？ お父様何かお話があるのでは？」  
「ふう、何時から気付いていた」

「最初から、と言いたいところですがつい先程までお父様の存在に気が付きませんでした」

「そうか、私はまだまだ現役でいける、ん？ クロフィ待て」

「何ですか？」

正直言つて早く終らせたい気持ちもあるが、大事な話かも知れないので一応真面目に聞く。

「私の隠蔽が完璧で私に気付かなかつたんだよな？」

「だから言ってるじゃ無いですか。お父様の存在に気が付きませんでした、と」

「え？ ねえ!? それってどういう意味なの!? 私という存在に気付かなかつたっていう意味なの!?!」

「さあ？ どうでしょうね」

「クロフィの私への対応が日に日に酷くなっていく」

「そんなことはどうでも良いんです。話は何ですか？ また、敵の殲滅ですか？」

俺がそう問い掛けると空気が一変し先程までのおちやらけた雰囲気が消える。

「それはあながち間違つてはいない。だが今回は何時もの物とは比べ物にならない」

「それはどういう」

「これまでとは格段に違う強さだ。このスカーレット家に敵対する勢力が此処に攻め込もうとしているらしい」

敵対する勢力だと？

「その情報は確かなんですか？」

「ああ、私の眷族に調べさせてある。これは確かな情報だ。行つてくれるな？」

「はあ、ここで拒否権何て無いんでしょう？ それに俺が行かないと誰がいくつていうんです？」

「そうだな。クロフィ・スカーレットお前に敵対戦力殲滅の任務をソ

ギト・スカーレットの名において言い渡す。……必ず遂行せよ」  
「ハッ！」

敵対戦力。レミアアやフラン達を危険に遇わせる者は容赦なく全て潰す！

一方その頃

「うくん、お母様？ これはクランには合わないと思うの」

「そうね、こっちの黒いドレスを着せてみましょうか？」

「そうね！ そうしましょう！」

「これ、何時になったら終わるの？」

「私達が満足するまで!!」

それって何時なんだい？

本当に終わるのかな？ かな？

それから数十分後

「うん。凄い似合ってる！」

「女の私でも嫉妬しちゃう位ねえ」

「くらん、きれい！」

「さいですか。それで？ 満足した？」

「うん！」

「そうか」

礼装としてドレスとスーツは貰っておこうかな。

何かの役に立つかもしれないし。

鏡でチラツと。ふむ、やっぱり似合ってるだよなあ。

男なのになあ。

クロファイ兄さんは今、何をしているんだろうか？

私は男として何か大切な物を無くしていきそうです。

## 第4話 増加と減少

月明かりだけが照らす夜空を横切る1つの人影――

「はあ……妹分が足りない……」

――変態である

さて、彼――クロフィ・スカーレットが聞けば誰もがドン引く変態発言をしているのにはわけがある。

彼の父、ソギト・スカーレットに敵対勢力の殲滅任務を受け、紅魔館を出発する時に敵対勢力の拠点と概要が載っている資料を受け取った。

それを受け取ったクロフィは固まった。

なんとそれには敵拠点までクロフィでも数日はかかる距離だった。

クロフィの脳裏に一瞬紅魔館に来たところを迎撃するという選択肢が浮かんだ。

しかし、いつもは迎撃していたにも関わらずソギトが拠点を襲撃しろということはレミリア達を巻き込む可能性がある強敵ということだ。

敵資料を読んでみればまさしくその通りだった。

敵――ヴィゴレ・フォンセ。

クロフィ達と同じく吸血鬼であった。

ヴィゴレは彼の父である前当主が早くに亡くなり、若くして――それでも100歳を超えているらしいが――当主となった。

彼の性格を一言で表すなら――戦鬪狂。

強者と分かれば人間だろうが妖怪だろうが神だろうと関係なく戦いを挑む。

それでもなお100年以上の時を生き延びている<sup>ばけもの</sup>天才。

父である前当主ですら手を焼いていた彼が手綱を握る父が死んでからたった数年。

その数年で彼はスカーレット家以外の近隣勢力に喧嘩を売り――全て力でねじ伏せている。

そんな相手と紅魔館の近くで戦えば勝ち負けを抜きにして考えて



もレミリアとフランを巻き込む可能性が高すぎる。

ソギトも達したであろう結論にクロフィも達すると血涙を流しながら、断腸の思いで、苦渋の決断を下した。

すなわち——数日の間レミリアとフランに会えないという地獄を味わうことを。

さて、このように敵であるヴィゴールの情報を見てなおクロフィは余裕綽々である。

自分の能力さえあれば誰にも負けないという自負があったためだ。分かりやすく言えば調子に乗って油断していた……。

「お、あれかな?」

紅魔館を出発してから五日目。

ついに目的地と思われる建物が見えてきた。

それは森に囲まれた古びた古城の様であった。

「さっさと世界の宝わがいもつたちに手を出そうとした罪を懺悔させて、命を以て償わせてレミリア達の元に帰らねばッ」

そんな（謎の）使命感を抱きつつ、古城に近づくと古城の上空で腕を組んで待ち構えている男がいた。

紺色の短髪に吸血鬼特有の赤い瞳。

クロフィと同じくコウモリの羽を羽ばたかせ、不遜に笑いかける少なくとも外見的にはクロフィより僅かに年上程の青年。

「強い魔力が近づいてくると思ったら吸血鬼か。へっ、血が滾るぜ。俺の名は——ッ!」

自分の名を告げ、その後クロフィの名を問おうとした吸血鬼はだが、そんなことは興味もないクロフィが能力を発動させ、力を落とす、上空から落下させた。

困惑しながら落下していく吸血鬼に冷たい視線を送りながら、自身の周囲に100に及ぶ無数の魔力弾を作成。

それらはクロフィの羽の動きに合わせて一斉に古城の屋根に墜落した吸血鬼に殺到した。

「さてさて。終わった終わった。さっさと帰ろ」

轟音と土煙を上げながら崩れていく古城には目も向けず来た方向

に振り返りながら伸びをした。

そんな隙だらけのクロフィへ土煙を裂きながら高速接近し。

吸血鬼は何かに気づき振り返りかけたクロフィの頬へ拳を叩き込んだ。

鈍い骨の碎ける音を置き去りにしてクロフィは体勢を立て直すことも出来ずに吹っ飛んでいく。

そして、先回りした吸血鬼が指を組んだ両手をハンマーのように振り下ろした。

まるで隕石が落下したかのような爆音が地を揺らした。

「ゴホッ……ゴホッ」

巨大なクレーターの中央で吸血鬼に転生してから初めての重症を負い、血を吐きながら膝を着くクロフィの前に吸血鬼がゆっくりと降り立った。

「さて、やり直すか。俺の名はヴィゴレ・フォンセ。お前の名は？」

獰猛に、不遜にクロフィを見下ろしながら嗤う吸血鬼——ヴィゴレ・フォンセをクロフィは睨み返した。

(どうなってやがるッ……)

だが、その内心は軽いパニック状態になっていた。

なるほど、反撃された。

それは分かる。

敵から目を離し、戦闘態勢を解いたクロフィはさぞ攻撃しやすかったことだろう。

だがそもそもクロフィが戦闘態勢を解いたのは殺ったという確信があつたからだ。

吸血鬼であることを考慮して自身でもまともに動けなくなるほどヴィゴレの身体能力と魔力を低下させ、その後に吸血鬼でもまともに食らえばタダでは済まない程の魔力弾を浴びせた。

それにも関わらず何故生きている——ッ!?

ヴィゴレに目を向ければ、無傷ではさすがに済まなかったようではある。

体の至る所から出血し、肉がえぐれ骨が露出している部分すらあ

る。

だがその怪我すら10秒程度で完治してしまった。  
それを見たクロフィは目を見開く。

吸血鬼だとしても異常な程の回復速度だ。

(並の吸血鬼以上の回復速度で押し切った？ いや、こいつはその後の攻撃も異常だったぞ!?)

クロフィは自分の考えを即座に否定した。

クロフィの不意を着いたヴィゴールの拳は頬の骨を完全に粉碎し、頭蓋にもヒビを入れ、首を折った。

続けての攻撃は咄嗟にガードした両腕を砕いた。

吸血鬼同士の戦いでここまでのダメージを一方が負うなど普通ではない。

混乱し続けるクロフィの耳にヴィゴールの声が届いた。

「なんだ、混乱しすぎて答えらんねえのか？ いいぜ、てめえの疑問に答えてやるよ。俺の能力は「ありとあらゆるものを増幅させる程度の能力」だ！ 力だろうが回復速度だろうがな！」

それを聞いたクロフィは目を見開く。

「自分とまったく真逆の能力。」

なるほど、それならば全てに合点がいく。

クロフィの能力を自身の能力で相殺し、最初の弾幕を迎撃して、油断して能力を解いたクロフィに増幅した力で攻撃したのだろう。

「てめえの能力は能力低下系だろ？ ははっ、やっと俺とまともに闘り合える奴に会えたぜ！ さあ、とことん闘り合おうぜ！」

そう言つてヴィゴールは自分で名前を聞いていたことを忘れたのか、興味を失ったのか。

地面を蹴り碎き、クロフィへ突進する。

「チッ！」

舌打ち1つ。

クロフィは後ろへ飛びながら、魔力弾を放ち迎撃する。

もちろん、能力を使って力を下げながら。

未だ治っていない腕では、殴り合いは不可。

即断し、魔力弾による遠距離戦を行う。

魔法が使えないクロフィでは魔力弾を打つ以外に遠距離攻撃手段はないが折れた腕で殴り合いをするよりはだいぶマシだ。

ヴィゴレは互いの力を相殺し合っているにも関わらず、クロフィを上回る速度で迫る。

年齢差か、もしくはヴィゴレが特別身体能力が高いのか。

十中八九後者だろうと考えながら、腕が治っても殴り合いで勝つのは難しいかと思案する。

そして、ヴィゴレはクロフィの魔力弾が当たるといふ所で驚きの行動を取った。

「オラァー！」

何とクロフィの魔力弾を拳で迎え撃ったのだ。

もちろん魔力弾はヴィゴレの拳を焼く。

だが、自身の魔力で防御した拳にはダメージが少ない。

「そんなもんかア!」

魔力弾を全て殴り潰したヴィゴレが叫びながら血塗れの拳をクロフィへ振り上げる。

「なんでも力で解決しようとしてんじゃねえぞクソ脳筋が!」

そう叫び返したクロフィの身体が無数のコウモリへと変化した。

「んな!」

ヴィゴレの拳が空を切り、クロフィが変化した無数のコウモリ達はヴィゴレを取り囲み、一斉に弾幕を張った。

「それがどうしたア!」

そう叫び、地を蹴り碎き前方へ飛び出し、弾幕を浴びながら、コウモリへと接近する。

そして、コウモリ達を引き裂かんと爪を立て腕を振るうが。

それより早く全てのコウモリ達が霧へと変化する。

その霧はヴィゴレの頭上に集まると元の姿に戻った。

「お前は狂ってんのか!」 弾幕に突っ込むとか頭おかしいんじゃないか!」

ヴィゴレの行動に堪らず叫んだ。

「てめえこそ小細工ばかり使ってんじやねえよ！ 男なら黙って殴り合い一択だろうが！」

ヴィゴレも負けじと叫び返す。

「小細工ってなんだ！ コウモリや霧に変化するのには吸血鬼の能力だろうが！ お前だつて出来るだろ！ なんてそれで弾幕を避け無かつたんだよ!？」

そう、クロファイが使ったコウモリや霧への変化は吸血鬼特有の能力である。

故にヴィゴレは先の弾幕をそれらで対処すると思つていたので、あまりにあんまりな行動に霧への変化が間に合つたのは奇跡に近い。

もちろんヴィゴレもコウモリや霧への変化は出来る。出来るが

「んなことしたら面白くねえだろうが！」

「殺し合いに面白いもクソもあるかアアアアツ！」

どうやらソギトからの資料以上にぶっ飛んだ思考回路をしているらしい。

クロファイはそれを再確認した。

「ハア……ハア……もういい、バカと話すのは無駄だな。なら、世界の至宝たる我が妹達に手を出そうとしたことがどれほどの大罪かその足りないおツムに力づくで刻み込んでやるよ！」

そういつものドン引き発言を吐きながら、回復した拳を構えて、ヴィゴレに突進した。

「ああん？ ……よく分かんねえがやれるもんならやってみやがれ！」

どうやら脳筋にはシスコン発言はよく分からなかったらしい。

だが、そんなことはどうでもいいと拳を構えて迎え撃とうとする。

両者が激突しようとしたその時。

再びクロファイの体が霧へと変化してヴィゴレの体をすり抜けた。

「はっ！」

間抜けな声を上げるヴィゴレの後ろで元に戻ったクロファイは

ヴィゴーレの頭部を全力で殴り飛ばした。

吹っ飛びかけたヴィゴーレだったが地面を蹴り碎き、即座にクロファイへ拳を突き出した。

クロファイはそれを左の羽を硬質化させ、盾状に変形させてガードした。

吸血鬼の羽は質感や形状を自由に変化させることが可能の万能兵器である。

その羽に鈍い音を立てて拳がめり込むが、体には届かない。

「てめえ！ 小細工なしで殴り合うんじゃないか!？」

「誰がんなこと言った！ 自分より力が強い相手と力比べするか普通！」

「すんだろうが普通！」

「しねえよ！ お前が常識を語るな！」

クロファイに常識を語る権利があるかは甚だ疑問ではあるが、言うことはクロファイの方が正しいのは事実である。

言葉の応酬をしながらも戦闘は続けている。

クロファイは反対の羽を刀のように変化させ、ヴィゴーレへ振り下ろす。

ヴィゴーレはそれを自身の羽を硬質化させ、防ぐ。

そして、拳がめり込んだ羽をその手で掴み、反対の拳を振るう。

クロファイはそれを両手をクロスして防ぐ。

さすがに骨が折れることはなかったが、それでも腕が痺れた。

「まだまだ行くぞゴリアー！」

右手でクロファイの羽を逃さぬように掴みながら左手で連続でクロファイに拳を叩き込む。

「ぐ……ぐぐ……っ。ちよ、調子に乗るなア！」

クロファイは周囲に魔力弾を展開。

一斉にヴィゴーレへとぶち当てた。

だがやはりバカのようにダメージを無視して殴り続けるヴィゴーレに舌打ち1つ。

自身の掴まれている羽を千切り、後方へ跳んだ。

「逃がすかア！」

「逃げねえよ！」

クロフィを追いかけようとしたヴィゴレに逆に接近し、拳を振るった。

ヴィゴレはそれに反応し、拳を突き合わせた。

その衝撃に地が抉れ、木々が吹き飛ぶ。

強大な力同士の激突はやはりと言うべきかクロフィが力負けし、体勢を崩した。

そこについてヴィゴレが上段蹴りを放つ。

だが、その足をクロフィが残った羽で斬り飛ばした。

「チイッ！」

ヴィゴレは舌打ちをするが、空を飛べる2人ならば足を切り飛ばされても戦闘不能にはならない。

ヴィゴレはならばと両羽をハンマー状にして連続で振り下ろした。

クロフィは弾幕を放ちながら後方に飛ぶ。

「またそれか！ 手札切れなら小細工なんざやめて素直に殴り合えや！」

弾幕を両羽で弾きつつ、接近しながら、クロフィへ叫ぶ。

「るっせえ脳筋！ その小細工でジワジワとダメージを受けてるくせに！」

クロフィはそう叫び返して振り下ろされた2つのハンマー状の羽を両手で受け止める。

そして、残った羽で切り裂かんと刀状の羽を向ける。

それをヴィゴレは真剣白刃取り。

そのまま羽をへし折る。

だが、クロフィはレザー状の魔力弾でヴィゴレ腹を貫いた。

「ゴハ……ッ」

血を吐いたヴィゴレの羽から力が抜けた瞬間、クロフィは羽を振り払い、ヴィゴレを殴り飛ばした。

だが、殴り飛ばされると同時にヴィゴレも拳を振るい、クロ

ファイを殴り飛ばした。

「ハッ！ そう来なくっちゃな！」

口元を拭いながら、そう言って笑う。

同じく口元を拭いながら、眉を顰める。

両者は示し合わせたように地を蹴り、拳を突き合わせた。



「ハアッ……ハアッ……ハアア……」

戦いの決着が着いたのは東の空が白んで来たところだった。

両者肩で息をし、身体中ボロボロであるが、立っていたのはクロファイだった。

「ハハハ……ッ。最っ高の遊びだったな……。またやろうぜ」

「ふぎ、けんな。二度とゴメンだクソ脳筋が……ッ」

満足気なヴィゴーレとは対照的にクロファイは疲労困憊である。

「そう言うなよ、マブダチ。お前だって全力で運動して楽しかったら？」

「こんなズタボロになるまで運動なんかしたく——って今なんつった。マブダチ？」

「おうよ。男同士が殴り合やあ、その後はダチよ」

「アホか、殺し合ってたんだぞ……それに俺の妹達に手を出そうとした大罪人は死刑と決まってるんだよ」

「妹だあ？ どういうことだよ」

「俺の名前はクロファイ・スカーレット。お前が襲撃しようとしたスカーレット家の長男だよ」

「ああ、喧嘩売ろうとしてた家か。ハハッ思った通り面白い相手がいんじゃないか。おう、ダチの妹に手を出そうとして悪かったな。許してくんねえか？」

「いや、ダチじゃねえの……」

だが、クロファイとしてもこんなにダチダチ言われると殺す気が失せる。クロファイはため息一つ。

とりあえず朝日が刺し始める前に移動しようとしてヴィゴーレの腕を



掴み引きずりながら、日光を凌げる場所へ歩き出した。

「なあマブダチよお……助けてくれるなら引きずらねえでくれねえかな」

ヴィゴールの要求を無視しながら、クロフィはそういえばと気がついた。

今世になってから友達は一人もいないかもしれないと。

それに気がついたクロフィの足取りが重いのは、体の傷やうるさい荷物のせいだけではないだろう……。

## 第5話 記憶と狂乱

クロフィ・スカーレットが戦っていた。

その5日前まで時は遡る。

兄のクロフィ・スカーレットが館から出ていったのを私はフランと見届けてから館の中に戻った。

「ねえ、おとうさま？ おにいさまはどこにいったんですか？」

「お前の兄様はね、お前達を守る為に行ってしまったよ。何処に行つたかはわからないさ」

何気ないフランと父の話を横で聞く。

守る為に？ まさか戦闘か？ こんな時期に？ まだ代替わりの時期でもないというのに。

まさか、父と母の暗殺？ 俺達の誘拐？

はあ、私がおかを考えたところで何かがわかるわけでも無し。

この話は聞かなかったことにしよう。

所詮産まれたばかりの吸血鬼だ何が出来るわけじゃない。

「さてと、フランあっちにいこう？」

「わかった!! おとうさま、またね！」

「ああ」

今日は何をしようか？

何時もみたいに不思議なこの力の練習でもするか？

兄さんとレミリア、父母も何か力を持つてるらしいが見たことはない。

恐らく危険な物なのだろう。

私と同様フランも少し前に力の兆候が見られた。

フランが手を握ると近くの物が壊れたのだ。

あれを壊れたと表現するには少し過小評価かもしれない。

あれは「破壊」だ。小さいものなら塵も残さずに木端微塵に破壊してみせた。

なので俺は出来るだけフランにその力を使うなどは警告している。身内に使われてはそれこそ文字通り1発で死んでしまうのだから。

一度フランに生物を破壊してもらおうとしたが、どうやら「今はまだ」コツは掴めないとのこと。

どうやって力を使っているのか聞いてみたがよく分からない。

見た目相応の可愛らしい表現ではあったが。

何？ きゅつとしてどつかーんって？

わからない。いや、わからないわけではないんだけど、非常に伝わりにくい。

手を握るという1つの操作が必要なのであれば何かを握り潰しているのだろうか。

それで物が爆発すると。

それでそのフランとの双子の兄の私だが陰と陽、表裏一体なのかは知らないが「破壊」の真逆の恐らく

「創造」の力を私は持っている。

この持っている力が創造なのかはまだわからないけど。

創造というには少し、大分？ 制度が低い。

未だに石ころしか創ることが出来ない。

創造するにはその創造する物を知らないといけない。

つまり莫大な知識が必要なのだ。知識も必要なだけど精神統一、何時であれ冷静に心を沈めていなければ使えない。

一度心が乱れてしまえば使える使えなくなってしまう。

それで一度創造したものが暴発して庭にクレーターを生み出したことがある。

あれは反省だ。

「克蘭、へんなかおしてる」

「私は変な顔なんてしてない。今日は何して遊ぶ？ しりとり？ トランプ？ 鬼ごっこ？」

ふふん！ レミリアや兄さんに教えてもらった数々の遊びを習った私には最早出来ない遊びなど殆ど無いのだ!!

「あれがやりたい。じゃんけんー！」  
なるほどじゃんけんか。

じゃんけんとはグー、チョキ、パーの3つから選び二人以上で出し

あい勝ち負けを決めるというものだ。

グーはチョキに強くチョキはパーに強い。そしてパーはグーに強いと三竦みになっているのだ。

このゲームを考えた人間は天才だと私は思ってる。

だが元々は人間のゲーム、吸血鬼には少し物足りない。そのため……………。

「最初はグー、ジャンケン!! ポ」

ポンを言い終わるその前に二人で何の手を出すか吸血鬼の動体視力がありつたけ使い相手の手を見極め何を出すかを決める。

これは、パーか!! ならここは裏をかいてグーだ!

何!? まさか、グーを出して来るのか!?

これはまさか、誘っている? 俺がパーを出そうものならすぐさまチョキに変える? 甘い、甘いぞフラン。敢えて乗ってやるよ! それにな!

俺はパーを出しフランがチョキを出そうとした瞬間、グーに戻す。

「ン!!」

ここままで僅か0.5秒。このジャンケン、今回は俺の勝ち!

「あああ、まけちゃったー」

「ふふふ、まだまだよな!!」

よっぽど悔しかったのかその場で座り込んでしまうフラン。

さてさて、このジャンケンだが頭の回転の早さと動体視力等々、それらを全力で使って遊んでいるのだが一回するだけでもすごい労力だ。

そのためこのジャンケンは1日に1回程度しか出来ない。

このジャンケン、1日の日課となりつつあるが何かを賭けないと面白くない。

なので何時もその日のお昼のオヤツを賭けているのだ。

「さて、フラン今日のオヤツはプリンだったか?」

「あっ! ひ、ひどい!! フランもたべたい!!」

「でもフラン負けちゃったからなく? どうしよつか?」

「いいもん! クランの、クランの、えくと、えくと」

何を言いたいのか、というかどんな単語を言えば良いのかが分からない様子のフラン。

「馬鹿、か？」

「それー！」

こんな言葉ばかり教えてはいけけない気がするが私には関係ない。まあそこら辺は兄さんか母がどうにかするだろう。

それはそれとしてだ。

「それじゃ食堂に行ってくるからな？　もし、わけてほしいなら着いてくるんだな」

これは少し意地悪か？

まあ、元々フランのオヤツを食べる気はさらさら無いのだが。

「べつにいい!!　ここにいて!!」

ふむう、怒らせてしまったか。

「じゃあ行ってくるからな？」

「ふんっ！」

ちよつとやり過ぎたか？　うん、やり過ぎたな。

これは今回は粘るなあ。

拗ねるのなら私は知らない。そこで居れば良いよ。

拗ねているフランを放って館へ歩いていく。

そしてフランと離れ館の扉の前まで着いた所で何やら自身の体に違和感を感じた。

「何か体が重い？　頭にモヤがかかっているみたいだし」

もしかして何かの病気か？

でも吸血鬼って病気になるのか？

それとも、少し前にやったジャンケンの疲労？

いやいやそれでもここまでの疲労は今まで感じた事無かったし。

ただの遊びでここまで酷くなるなんてあるわけ無い。

私は頭を振り館の廊下を歩く。歩いてしまう。

やっぱり何かおかしい。一步一步と進んでいくにつれて体調が悪化している。

脂汗も出てきだした。

歩く、足が震えてだした、歩く、汗が止まらない  
歩く、吐き気がしだした、歩く、恐怖を感じる  
走る、目がチカチカしだした、過呼吸になった  
腕が満足に動かない、足が動かない、転倒する、  
膝を擦りむいた、血が出る、体の震えが止まらない、這いずる、進  
む、前へ進む、止まらない。

怖い、怖い、怖い、目の前が真っ暗になる。  
夜じゃない、目が、見えない？

嫌な予感がする。

何かが私の心を支配する。

真っ黒で底が見えない闇のような泥。

私にまわりつく。

沈む、消える。私が消える、消えてしまう。

嫌だ、嫌だ、嫌だ!!

泥が私の体に入り込む。私の、私の心を染め上げる真っ黒に黒く黒  
く、狂気の色に、私が私で無くなってしまふ。

黒く灰色になる。灰色に。灰、色？

何かが消える、記憶が消えた、一つ一つ消えていく、また一つ消え  
た、何も思い出せない。

思い出せ、思い出せ、記憶が流れ込んでくる。

ああ思い出せた!! 私の、私のき、おく？

ち、違う! これは私の記憶なんかじゃない!!

誰、誰の記憶なんだ!? 違う「俺」の記憶だ。

違う! 「私」の記憶じゃない!!

私の記憶が嘘の記憶で塗り替えられていく。

ああ、俺は／私は……………俺だ／誰だ？

私が俺に切り替わる。

綺麗な銀髪も赤黒く染め上がり、羽も歪な形に変わる。

はは、ハハハ!!

アア、力が溢れる。

これは悪かねエな。最高だ!!

「クラン!？」

「アア？ 誰だ？ ……………子供？ 人間か？ 人間、じゃ無いな。これが吸血鬼か？」

「そこをどけよ、吸血鬼」

「クラン、じゃない。貴方、誰なの。クランを返して」

「そりゃ出来ねエ相談だな。俺もこいつも離れたくても離れられねエからな。俺とコイツは一心同体ってことだよ。まあ勘弁してくれや」「それで許すとも思ってるの？」

「なるほどなるほど俺と殺りたいってことかア？」

「ハハハ!! 。殺り合うってんなら俺は容赦しねエぞ!! ブチ殺してやる!!」

「もちろんよ」

「無茶というか無謀というか。」

「だが」

「嫌いじゃねエなア! 。そういうのはよオ!!」

「そう、お前からクランを返さして貰うわ!!」

「そうこなくつちやなア!!」

「素早く近くの像から剣を奪い取り応戦する。」

「はあっ!!」

「吸血鬼の周りから光の玉が出てきやがった？」

「なんだ？ 魔術、魔法、て訳でもねエな。魔力を固めて撃ってるだけ?」

「コレが弾幕ってやつか？」

「中々密度が多いな、流石は吸血鬼って所か。」

「だが俺には関係ねエ。」

「光の玉が俺に触れようとした瞬間に全てが弾けていく。」

「嘘、何で」

「こんな物、剣一本あればどうともなる」

「弾幕を俺の体に触れる前に全て剣で弾き飛ばしている。」

「くっ! ならもつと密度を上げるだけよ!!」

「先程より密度が濃くなった、か。」

だが関係ねエ!!

「馬鹿なの!?! この弾幕の中を突つきつてくるなんて?!」

「ハハハ!! そんなの知るかよ!!」

ア? 止まった? 何故だ?

俺の一閃が吸血鬼の首に迫ろうとした時、俺の腕

止まったのだ。

アア、そうかそうか。まだお前が残ってたか。仕方ねエ今回は諦めるとするか。

別に俺はお前を殺したい訳じゃねエしな。

「とりあえず」

「ガハッ」

吸血鬼の前で瞬時に動きそのがら空きの腹に1発入れ気絶させる。

「吸血鬼つてえのは面倒クセエな、こうして気絶でもさせとかねエとすぐに復活する。」

さて、俺はここから逃げらしてもらおう。いくら吸血鬼でもアレは俺でも死ぬ」

「どこへ行くこうというのだね」

「アア? 誰だ? テメー」

次々と、面倒クセエ。

さっきの吸血鬼よりも中々強そうな奴だな。

面倒クセエな、後ろの奴もヤバい、つてのに。

とうかさつきより力が強くなってねえか!?

オイオイ、オイオイ!! ヤベエつて!!

何だこれ!?! 威圧が半端じゃねエぞ!?

「オイ! 流石にこれは止めた方が良いんじゃないやねエのか!?!」

「ツ! 思っていたよりも力の暴走が激しい!! お前も来い!!」

「ハア!?! 俺は関係無いだガフツ!」

服の襟首を掴まれそのまま引き摺られていく。

オイ、この体はお前の息子のモン何じやねエのかよ。

しかも娘を放置かよ。ア? 母親か? 保護していったな。

てかよ、何時まで引張ってんだよ。



そのまま外に出るとそこは無惨な光景が広がっていやがった。

「オオ、思ったよりもヤバイ状況じゃねエかよ」

「ここまでだとは」

そこには一つの大きなクレーターを地面に開けその上の空に停止している吸血鬼がいる。

「ねえ?? 貴方達は壊しても良いのかな?? クランに言われてるんだけど良いよね!! もう殺るわ!! 我慢出来ないもの!!」

「ッ!」

何だ、このゾツとする威圧感は。これが、本当の殺気と狂気か。

俺の物とは比較にならねエ。

ン? オイ、オツサン何故構える。

闘うのか、コレと。

マジかよ。流石に俺でもそこまでやれねエよ。

「フラン、しつかりしなさい」

「私に指図? うるさいな、お前黙れよ」

「暴走仕切った後では二人を近づけても駄目か」

「オイ、暴走ってどういうことだ?」

「フランとクランが一定以上離れたからこうなっている」

コイツとアレが一定以上離れたから?

どうということだ?

「つまりアレを止めるにはどうすれば良いんだ?」

「シヨック療法だ、ダメージを与えて止める」

「ナッ!? オイ! 正気か!」

アレにダメージを与えて気絶させるってエことだろ!?

正気の沙汰じゃねエ。

「正気、だど? 狂気に染まり私の息子に寄生しているお前には言われたくは無い言葉だな」

「チツ、寄生とは酷い良いがかかりだな」

そもそも俺はここに存在してる。

「ウフフフフ!! アハ、アハハハ!!」

「チッ! 離れろ!!」

アイツが手を突きだしたってエことはかなりヤベエな。此方はまだ自分の能力もロクに扱えてねエってのによオ。

「良い、見ている」

「ハア!? 何を言ってる?!」

金髪の吸血鬼を流れる水が囲い、長身の吸血鬼の周りに光弾が現れる。

まさか、コレが魔法なのか?

光弾は金髪の吸血鬼に次々と当たっていくがあまりダメージは見受けられねエ。

「この魔法も長くは持たん!! 何かフランを拘束する手立ては無いのか!!」

「拘束する手立て、つってもまだ能力何て使いこなせねエっての!! まだ大雑把なモンしか出来ねエぞ!!」

「拘束出来れば今はそれで良い。やれ!!」

「クソが!! アア、やってヤンよ!!」

足を地面に思いつき踏みつけ地面から石状の縄を出しそのまま金髪の吸血鬼を拘束する。

それでも吸血鬼の身体能力で破壊される。

何度も何度も縄を継ぎ足していく。

「オイ!! こつちもそこまで持たねエぞ!! どうすんだ!!」

こつちもソロソロ疲労が溜まって来やがった。

「植物を生成することが出来るか!」

「植物だと? 出来ねエよ。そもそも今、そんなモン創造してどうすんだよ」

「いや、良い。なら最初の作戦でいくまでだ。お前がフランを拘束している間に私の能力で仕留める」

「それはアノ吸血鬼を殺すってエことか?」

「殺す訳がないだろう、気絶させるだけだと言っている。お前が思っているより吸血鬼は存外タフだ。だが少し時間がある」

「チツ! 何だ? それじゃあ俺はその間に足止めでもしておけてエことか?」

「ああ、少しの間だけだがな。やれるか」  
なるほどなるほど、俺のことをお前が過小評価していたのは分かったよ。

この位の敵、どうってことねエってことを見せてやる。

「やってやらア!!」

「まかせたぞ」

「アハハハ!!」

何時聞いても胸糞ワリイ声だなア。

金髪はまだ魔法、弾幕を使ってこねエ。

その分近付きやすいのだが、少し能力が厄介だ。

馬鹿みてエに金髪に近付けば能力の効果範囲内に入り一発でバ  
ンッだ。

つまりは長距離戦ってエことだ。

持っていた剣を金髪に向けて投擲する。

「シッ!!」

「アハハハ!! そんな物が効くと思ってるの?!」

投擲した剣を金髪が掴みとる。

「効くんじゃねエのか? それ、銀製だぜ?」

「それがどうした、ツ!! 何コレ!! 形が変わって!」

剣の形が変わり金髪の体を縛り上げる。

「まだ創造は出来やしねエが形を変えて縄にするぐらい出来る。さ  
てエ? その縄は棘付きだ、動けば動く程絞まっていくぜ?」

「クッ! こんな物!!」

「チッ! 解かれるのも時間の問題か、オイ! まだか!!」

「準備完了だ!! そこをどけ!!」

何やら白い光を体に纏い金髪の方へと飛び立つ。

「ウフフ、甘かったわね!! 体を縛り上げられたからって能力が使え  
ないわけじゃ無いのよ?!」

「しまった!!」

金髪が目を長身の吸血鬼の方へと向け手を握り締めた。

それと同時に長身の吸血鬼の下半身が破裂するような音をたて

吹っ飛ぶ。

「グツ!! フラン!! 待っている!! 今、助けてやる!!」

「来るな来るな!! 来るなあ!!」

自暴自棄になったのか縄が絞まるのも気にせず暴れだす金髪。

「来るな!!!」

一層声を荒げる金髪を抱き締める長身の吸血鬼。

「フランすまなかった。もう、良いんだよ。暴れなくて良い。少しの間、眠っていてくれないか?」

「私は、私は!! まだまだ!! 殺して、殺しやる!! 壊す壊す!! 壊すう!!」

一気に気が狂ったのか支離滅裂な言葉を言っつていやがる。

それを宥めるかの様に吸血鬼が纏っていた光が強くなり金髪をも包み込みそのまま一つの球体となった。

「嫌だ!! いやあ!! この光は嫌なの——!!」

「フラン、やめなさい。これ以上は駄目だ」

「嫌よ嫌よ!! 嫌々!!」

駄々をこね続けている。

アア? あア、俺もそろそろか。

そのあとは光がより一層強くなり中の声は聞こえなくなった。

その後数分たった頃光が消え、身体中の皮膚がボロボロになって落ちてきた金髪と、恐らく長身の吸血鬼だった物であろう肉片と炭が落ちてきた。

金髪の方は流石と言わんばかりか、治癒が始まっていた。

肉片の方は既に燃えており治癒が始まる様子は無い。

ひとまずボロボロの金髪を日陰に引きずり込み俺もそのまま意識を落とした。

## 第6話 吸血鬼（ヴァンパイア）ハンター

克蘭・スカーレットは自身にのしかかるような重みで目が覚めた。

「う……ん？」

「良かった！ 目が覚めたんだね！」

大きなベッドで目を覚ました克蘭に反応したのはベッドの左隣から覗き込んでいた紫髪の吸血鬼の少女——レミリア・スカーレット。

さらに寝ていた克蘭の右腕に抱きついて金髪の吸血鬼の少女——フランドール・スカーレットが涙を浮かべながら寝ている。

「……え……と？」

レミリアの声にフランに抱きつかれたまま起き上がった克蘭はレミリアに抱きつかれ克蘭は困惑したような声を上げる。

「どうしたの？」

それに反応したレミリアは一旦克蘭から離れ、克蘭の顔を見る。

「あの、貴方誰ですか？」

その言葉にレミリアは絶句した様子を見せる。

「お、覚えてない……の？」

否定してくれと願うかのように吐き出されたその言葉は——

「すみません……何も……」

だがバツが悪そうに顔を逸らした克蘭によって肯定されてしまった。

その言葉を聞いたレミリアは口を手で覆い、瞳から大粒の涙を零しながら部屋から走り去ってしまった。

「うーん……？」

レミリアの出たいった扉に目を向けていた克蘭はその声に記憶を失ってしまったている克蘭にはレミリアと同じく見覚えのないフランへ目を向けた。

レミリアが走り去ったドタバタで目が覚めたのか呻き声を上げな

がら起き上がる。

「ふにゃ……………」

目を擦りながらクロフィがこの場に居れば発狂するような可愛らしい声を上げて、寝ぼけ眼で辺りを見渡し、クランと目が合う。

しばらく不思議そうに見つめていたが徐々に目が見開かれて最終的に大きく見開かれると大粒の涙を流しながらクランに抱きついた。

「よかった……………っ、おとうさまがしんじやってっ……………ぐすっ……………くらんまでおきなかったらわたし……………」

泣きじゃくるフランに記憶のないクランはどうすれば良いかわからない。

先のレミアアの態度から記憶がないことを話すのははばかりだ。

しかし、話さない訳にはいかない。

「あの……………すみませんが私記憶喪失みたいなんです……………」

「ぐすっ……………きおくそうしつ?…」

言葉の意味が分からないのか首を傾げるフラン。

それを見てクランは言い直す。

「その……………貴方のこととか自分のことも何も覚えてないんです」

しばらく首を傾げたままだったフラン。

しかし、理解したのか顔を歪めて叫んだ。

「そんな! ふらんはくらのいもうとでくらはふらんのおにいさまだよ! おもいだしてよ!」

クランの両肩を前後に揺らしながら、情報量の少なすぎる説明をするがクランの記憶は戻らない。

しばらくクランを前後に揺らしていたフランはクランの胸に顔を押し付けて先程とは違う涙を流し始めた。

「……………目が覚めたみたいね」

クランが対応に困っていると入り口から女性の声が聞こえてきた。そちらに目を向けると金髪の吸血鬼——アイチア・スカーレットが立っていた。

その表情は憔悴しきっている。

「えーと、貴方は?」

その言葉に一瞬ショックを受けた表情をしたが直ぐに戻り、ため息を吐いた。

「……レミリアの言っていたことは本当だったのね」

そして、アイチアはクランと自分達家族のことをクランに説明した。

その間にフランは泣き疲れたのか再び眠ってしまった。

「……なるほど」

話を聞き終わってもクランの記憶が戻ることはなかった。

話の中で自分達の父親が自分とフランの能力の暴走——主にフラン——が原因で亡くなってしまったこと。

それから自分は5日間眠っていたことも聞いた。

「貴方の記憶がなるべく早く戻るように私も調べてみるわ」

そう言つてアイチアはクランに背を向けて部屋を後にした。

その背中は酷く弱々しかった。



ここは紅魔館近郊の都市。

そこにある1つの酒場。

本来様々な人で盛り上がっているはずのそこで1つの集団が貸切にしていた。

「みんな！ 聞いてくれ！ やはりあの噂は事実だったようだ！」

彼らは吸血鬼ハンター。

復讐、または吸血鬼を倒すことでの報奨金などを目的とした吸血鬼を狩ることを生業とする者達である。

そんな彼らが集まっている理由は十日前に入ったある噂によるものだ。

その噂とは——紅魔館の次期当主が不在で現当主が急死したと。にわかには信じ難い話ではあったがどうやら事実だったようだ。

普段より紅魔館の警戒が薄く、内部を探った結果幼い吸血鬼の3人の子供とその母親だけだった。

「これはまたとないチャンスだ！ あの悪名高き紅魔館の吸血鬼共を一網打尽にするな！ 次期当主が居ない間にガキと女を殺し、罨を張

り、ノコノコ帰ってきた次期当主も始末するぞ！」

「「おうー」」

幼き吸血鬼たちに危機が迫ろうとしていた。



克蘭が目覚めてから5日が経過した。

その間、レミアアとフランに紅魔館の中を案内された克蘭だったが記憶が戻ることはなかった。

紅魔館の案内の中に紅魔館の庭に立てられた克蘭達の父親であるソギト・スカーレットの墓があったが記憶がない克蘭は実感が湧くことがなかった。

克蘭に記憶を戻す方法を探すと言っていたアイチアだったがこの5日間殆ど自室に籠りっぱなしだった。

さらに時々会ってもフランと克蘭に複雑そうな表情を浮かべて何も言わずに去ってしまう。

当然だろう。

わざとでは無いとはいえ自分の愛する夫を殺されたのだ。

愛する我が子とはいえ、憎んでいたと不思議はないのだ。

アイチアの内心が複雑な心境であるのは想像に難くない。

そんな重苦しい雰囲気の中、紅魔館に紅魔館の家事を行っている妖精メイドの音が響いた。

「奥様ー！ 大変です！ 武装した人間達が紅魔館に接近しています！」

紅魔館に緊張が走った。

ソギトもクロフィも不在の状態でも多数の武装した人間の相手。

妖精メイドだけでは無く、レミアアや克蘭達にも不安が襲った。

しかし、アイチアは妖精メイドの言葉に一瞬目を見開くも、瞳目した後、戦意が込められた目を開き妖精メイド達に指示を出した。

「全員戦闘準備！ 人間達を迎え撃ちます！」

妖精メイド達は慌ただしく準備を始めた。

それを見たアイチアは克蘭達へ向き直った。

「貴方達は隠れていなさい」



「嫌よ！ 私も戦うわ！ 私はお姉ちゃんだもの！」

レミリアの言葉にアイチアは静かに首をふる。

「ダメよ。お姉ちゃんならフラン達の側にいてあげなさい」

「おかあさま……」

フランも心配そうな顔で母を呼ぶ。

フランを見てアイチアは悲しそうな顔を浮かべる。

そして、フランを優しく抱きしめた。

「ごめんなさいね。あの人が貴方の力で死んでしまったから貴方とどんな風に接すればいいのか分からなくなってしまったの。ダメな母親でごめんなさい」

「ちがう……っ！ おかあさまはわるくないのっふらんが、ふらんがわるいの！ ふらんのせい……っ」

首を振りながらそう言うフランにアイチアは優しく微笑む。

「たとえ貴方の力である人が死んでしまっても貴方が私とあの人の愛する我が子とであることに変わりはないわ。だからそう自分を責めないでフラン」

そう言ってフランの額にキスをする。

「わからないよ……なんでおかあさまもおねえさまもおこらないの？

ふらんがおとうさまを……っ」

アイチアの胸に顔を埋めてフランは歯を食いしばる。

「貴方にも分かる時がくるわ」

アイチアは慈愛の笑みを浮かべてフランを優しく撫でた。

そして、克蘭に向き直った。

「貴方にも悪いことをしたわ。記憶を戻してあげることが出来なかった」

「……………っ」

もうこれで別れのように話す母親に克蘭は何も言うことが出来ない。

記憶が——思い出がないから。

ただ歯を食いしばる克蘭にアイチアは頭を撫でフランと同じく額にキスをする。

そして、涙を流すレミリアにも額にキスをしてアイチアは克蘭達に背を向けた。

「おかあさまー!」「お母様!」

「レミリア、フラン、克蘭……愛してるわ」

呼び止めようとするレミリアとフランだったが、アイチアはそう言っただけ振り向かず毅然と歩き出した。

「おかあさまー!」「お母様!」

「ダメだ!」

追いかけてしようとしたレミリアとフランの腕を掴み克蘭は叫んだ。

「はなして! おかあさまが!」

「お母様死ぬ気よ!? 止めないと!」

2人は振り払おうと腕を振るが、克蘭の顔を見て動きを止めた。

克蘭は——泣いていた。

「ダメだ……っ、あの人の思いを裏切っちゃ……っ」

何故か克蘭は涙が止まらなかった。

記憶がなく、この5日間ほとんど関わる事がなかった。

母親と言われても実感などわかない。

にもかかわらず涙が溢れて止まらなかった。

まるで魂が覚えているが如く。

「……行くぞ」

克蘭は2人の手を引いて歩き出した。

2人はもう抵抗しなかった。



「ここに隠れよう?」

隠れる場所を探していた3人だったが一つの部屋の前でレミリアがそう言って立ち止まった。

その部屋は彼女達の兄——クロフィ・スカーレットの部屋だった。

「……うん」

不安そうなレミリアの表情に克蘭は頷いた。

クロフィの部屋にはクロフィが出掛けている時にも鍵がかかっていない。

クロファイ曰く、「フラン、レミリア。俺が恋しくなったらいつでも俺の部屋に来ていいんだぜ？　そして「お兄様に包まれてるみたい〜」なんて感じでベッドに入ってもええんやで？　俺は帰ってきた時にフランやレミリアの匂いが見ついたベッドで寝ることができぶへら〜」とのこと。

最後の「ぶべら！」はドン引く変態発言に克蘭がぶっ飛ばした悲鳴である。

部屋に入ったフランとレミリアはそのやり取りを思い出し、僅かに微笑んだ。

だが、直ぐに怒号や金属音などの戦闘が始まったことを知らせる音が聞こえてきて2人の顔に再び不安を浮かばせた。

克蘭はすぐさま扉の鍵を内側からかけると部屋のダンスなどを扉の前に置いてバリケードにした。

そして、不安を紛らすように3人で寄り添い、祈った。

母の無事と——兄の帰還を。



それからどれだけの時間が経っただろうか。

響いていた戦闘音は既に止んでいた。

しかし、人間達とアイチア達のどちらも自分達を探しに来る気配がなかった。

「……………ねえ、1回出て状況を確認してみましよう？」

戦闘音を聞いているのも不安だったが何も聞こえなくなるのはそれはそれで不安が積もる。

状況が全く分からないままただ部屋に隠れ続けるのは辛い。

故に克蘭とフランは頷き、3人でバリケードを退かし、部屋を出た。

部屋を出た3人は足音を殺しながら入口の大広間を目指して歩き出した。

しばらく静寂に包まれた廊下を歩いていたが、大広間に近づくに連れて声のようなものが聞こえてきた。

それに顔を見合わせた3人は歩く速度を早め、大広間に向かった。



## 第7話

クランとフラン達が目を覚ましたその頃

「はあ——、早く妹達に会いたい。何故こんな男と二人きりで館まで帰らなければいけないんだ」

あの戦いのあと、館まで夜は飛行しながら、朝と昼間は日影に隠れながら歩いて帰っていたのだが思っていたより傷が深く、治療による体力の消耗が激しかったのか思うように距離を進められずこうしてダラダラとしながら道を歩いて進んでいるのだが。

それでも想定より早くここまで帰ってこれているのも妹達に会いたい一心なのだ。

妹パワーは偉大なのだ。

「そう言うなよ、俺達はダチだぜ？ 仲良くいこうぜ!!」

ムカツ

「そもそもお前のせいだろ?! 途中からお前の傷が深いから引き摺るなど文句ばかり言って! それで俺がおぶってやって!!」

だからここまで遅くなったってえのに!!」

ああ、イヤダイヤダ。

まさかこの背中に妹達以外を乗せるとは思いもしなかった。

「悪かった、それは本当に悪かったと思ってるんだぜ? でもよ、俺も大分やられちまつてるからな?」

「そもそも、それもお前が!! ………………はあ、もう良いや。こんなことしてる暇があったらさっさと館に帰った方がいい。無駄な体力は使わないに限る」

「おうよ!!」

コイツ、本当に置いて帰ってしまおうか。

いや、埋めて帰るのも有りだな。

「にしてもよおー、クロフィの館つてのには何時になったら着くん  
だあ?」

「俺の館じゃない、今はまだな。多分そろそろ着く筈だが」

はあー、やっと愛しの妹達に会えるぞお!!

ハッ！ まさか!! これは妹達と俺の間の試練なのでは?!

離ればなれになってしまった3人はこの試練を切っ掛けに更に仲を深めて!!

そう考えると今までの道程も苦では無いな!!

「グフ、グフフフフ」

「おい、どうしちまったんだ？ お？ 何か鼻から血が出てるぞ」

おっと、妹愛が鼻から溢れでてしまったようだな。

膨大すぎる愛は鼻から飛び出してしまうものなのだ。

「おっと、こんなことをしている場合じゃな……………ツ!!」

何だ、この圧はツ!!

並の生物が出せるようなものじゃないぞ!?

「これは、ヤバインじやねえか?」

「これは、一刻も早く帰るぞ!!」

今だに体の芯から震え上がらせるようなビリビリとした圧が襲いかかってくる。

歩を進めていくうちに圧が大きく重くなってくる。

森を抜けたその先にはあり得ない光景が広がっていた。

「嘘だろ、こんなことってあるかよ」

館が、紅魔館が半分消え去っていた。

「クソツ!! 俺が今するべきことは此所で呆けてることじゃないだろ!!」

館の門を潜り館の方へと走る。

そこにあつた光景は目を疑うものだった。

そこら辺に散らばる「何か」だった赤い物。

周りは赤く黒く染まり

串刺しになっている何かの肉。

山のように積み重ねられ血の匂いを放つ物体。

大広間であつたであろう部分の地形は変わり果てていた。

至るところにクレーターがあり、逆に鋭い棘のような突起物が生えている所もある。

その中心にこの惨状を作り上げたであろう人物が居るのだろう。

「酷どい、有り様だな」

後ろから追いついてきたのか、クソツ何を呑気に!!

「ツ!!」

落ち着け、感情に身を任せるな。

今は妹達を保護することが先決のはずだ。

「俺もやれることは手伝うぜ? そちら辺にあるコレを片付けねえといけないだろ? クロフィ、お前はお前の妹達を探してやれ」

「言われなくとも、分かっている」

フランとクランはこの中心に居ることは分かっている。

レミリアを探さなければ。

必ずレミリアは近くに居る筈だ、居る、筈なんだ。

「レミリア——!! 何処だ!! 何処に居るんだ!!」

レミリアはそこまで強くない、まさか、止めろ。

この考えは良くない、絶対にレミリアは生きてる。

存外レミリアはすぐに見つかった。

館内の廊下で倒れていた。

目立った外傷はなく、ただ気絶していただけだった。

「良かった。本当に、良かったッ」

俺はレミリアの体を泣きながら抱きしめる。

だがレミリアを見つけたがまだすべきことがある。

フランを見つけないければ。

だがレミリアをここに放置するわけにも行かない。

「妖精メイド、妖精メイドは居るか!!」

妖精メイド達に呼び掛けてみるも返事がない。

妖精メイド達もレミリア同様気を失っているのかもしれない。

仕方なく近くの客室のベットにレミリアを寝させ、その部屋を後にした。

庭へと戻ると、全ての物体は隅へと片付けられており、館のの中心部に巨大な鳥籠のような物が鎮座していた。

「何だあコレ?」

ヴィゴーレが俺にそう問いかけてくるも俺にもコレが何か分から

ない。

ただ普通の鳥籠とは違い外からは中の様子が伺えず、真つ暗な闇のような物が蠢くのみ。

ただ分かるのは、ここに二人が居るということだけだ。

近づくと何が起きるか分からないが鳥籠へと足を動かし、歩を進める。

「オイ！ 止めろ！ 何が起きるのか分からねえぞ!!」

後ろから声が聞こえるが無視し、鳥籠へと近づく。

鳥籠に触れようとした瞬間、俺は何かを察知しその場から飛び退いた。

飛び退いた瞬間、俺が居た場所から鋭い棘が飛び出してきた。

「チツ、なるほど完全防御って訳か」

恐らくクランの能力による物だろう。

力が暴走しているのか、意識が無く攻撃をしているようだ。

周囲に無差別に鳥籠に触れようとしている者に攻撃をしている訳か。

「何て悪趣味な、ヴィゴレ!!」

「何だ?」

「お前の能力は他人にも使えるのか!」

「ああ、分かったぞ。そういう事かよ。ほらよ、受け取れ!」

ヴィゴレの力によって俺の身体能力が上がる。

それと同時に俺の能力を行使し鳥籠の攻撃速度と攻撃力を抑制する。

鳥籠の元へと着くまで攻撃が絶え間なく続くが、全てを避けて移動し、そのまま鳥籠を叩く。

案外鳥籠の耐久力はそのままでなく簡単にねじ開けられた。

鳥籠を壊したと共に、鳥籠は消えて無くなり中から“3人”の人が出てきた。

1人目はフラン、泣き崩れたような顔をして眠っている。

2人目はクラン、こちらも同様眠っている。能力を使っていた影響なのか、髪色が少し変色していた。



3人目は、遺体だった。血みどろで、身体中に穴を空けられ、目はなく、心音も、息もしない。

それは誰だったのか、俺には分かる。分かっってしまう、分かっしまった。

母だ。自身の、スカーレット兄妹の母だ。

戦闘後にも関わらず、妹達が今日の前で倒れているにも関わらず。年甲斐もなく。俺は泣いた。

泣き崩れた。

俺が行動を始めたのは、もう涙を出す水分は体にはないのか、涙は出なくなり、嗚咽を漏らすだけになった時だった。

俺は兄だ、何を此所で泣いているのだ。

俺は長男だ、何をしている。

母が死んだ、恐らく父も死んでいるだろう。

もう妹達を、この館を守るのは俺しか居ないのだ。

何をしているんだ、クロフィ・スカーレット。

みつともない。妹達に笑われてしまうぞ。

自身の母をその場に残し、フランとクランを両脇に抱えレミアが居る部屋まで歩いていった。

ヴィゴレはずっと喋らず俺の後ろを歩いて着いてくる。

レミアの時は頭がいつぱいいつぱいで気付かなかったが、館のそこから中に妖精メイドの死体があった。

奥に行くほど減ってはいるが、見ている気持ちの良いものでもなかった。

俺はフランとクランをレミアが寝ていたベットに寝かし、部屋を出た。

「ハハッ、何してるんだろうな、俺。

妹達も守れず、両親は死に、館はボロボロ。

アハハ、俺がもっと早くしていれば両親も死ななかった。俺がもっと強ければ、俺がもっと賢ければ。

俺の対応が早ければ、もっと早ければ、速ければ」

あれだけ自分を鼓舞していたというのに、妹達を避難させた途端に



「追いかけてやれよ。それが兄つてモンだろ？ ダチよ」

ははあ、まさかこの馬鹿に言われるとは。

「チツ、そんなことお前にいわれなくても分かってる」

「そうかそうか!!」

どことなく嬉しそうに笑っているヴィゴーレ。

ハハツ、コレは一杯やられたな。

「行ってくる」

「おうツ！ 行ってこいよー」

俺は廊下を走っていったレミリアを追いかけ、俺も走る。

何故か、少しレミリアを追いかける俺の足は軽くなった気がする。



目が覚めた。

知らない天井だ。

いや、記憶がないから何処で起きても知らない天井だけれど。

唯一分かるのは、自室と言われたあの部屋くらいだろうか。

辺りを見回すと、特に何か変なことはない。

ただ、非常に「食欲をそそられる匂い」がするが。

自身が眠っていた、隣を確認すると金髪の吸血鬼が眠っていた。

記憶を少し漁ると、確か自身の妹だと紹介された気がする。

妹だと分かる記憶は全くもって無いのだけれど。

ベットの汚れ具合と自身と妹（仮）との間の空き具合を見てみるに

他の人が隣で寝ていた可能性がある。

さて、その人はどこに行ったのやら。

恐らく、といつても確定的に姉と紹介された吸血鬼と一緒に眠っていたのだろう。

ふむ、これから自分はどうするべきなのか。

この妹（仮）を置いていくのは何故か駄目な気がする。

そうになると、ここで誰かを待っていた方が健全かもしれない。

ふむ、いくら待てども誰も来やしない。

コレは些か不味いではなからうか。

なんとなしに、部屋は出たくない。

体はこの部屋から出たくないらしい。

どうか先程からドアの向こうにいる奴は何時になったら部屋に入ってくるんだ？

少し期待しているんだけど。

相手側も此方が起きているのは気づいている様子だが入って来ないところを見ると、恐らくこの番をしている、というところだろうか？

まあ何にしても私が考えたところで何かが分かるわけでもない。

ん？ 『私』？ すつと出たが、もしや一人称は『私』なのだろうか？

男なのに私なのか。

そこは気にしない方がいいかもしれない。

何故かそんな気がする。

誰も来ないのもあるが、この隣の妹（仮）も起きてこない。

もしや死んでいるのでは？

吸血鬼が形を残して死ぬことなんて殆ど無いらしいけど。

しかも息してるし死んでは無いのか。

グウウと私のお腹が鳴る。

私の腹の虫が騒ぎ始めたみたいだ。

お腹が空いているんだろうか。ここには食べるものなんてなさそ

うだ、今は我慢するべきか。

グウウ

それでも鳴き止まないのか、私のお腹は。

どれだけお腹が空いているというんだ。

原因は何となく分かる。

先程から匂ってくるこの、〃匂い〃だ。

この匂いのせいで飢餓状態に陥ってしまったているんだろう。

吸血鬼の本能か、血が吸いたくなってしまう。

だが吸う相手も居ない。

居るとすればこの隣で寝ている妹（仮）だが。

流石に妹の血を吸うわけにもいかないだろう。

ふむ、この際だから自身の血を吸ってみるのも悪くないかもしれない。

吸血鬼が自身の血を吸えばどうなってしまうのか、どれ少し味見を。

パクリと私は自身の腕に噛みつき、吸血鬼特有の少し長めの牙を突き立てる。

チクリとした痛みと共に血が入り込んでくる。

動作的には牙で穴を空け、そのまま血を吸い出すような感じだろうか。

味に関しては何とも言えない。

不味くもなく、美味しくもない。

お腹の足しにもならない。

ただ自身の体の血を循環させただけなんじゃ？

じゃあたいて意味がないな。

そういえば、部位欠損ってどうなるんだろう。

吸血鬼だから傷は治るんだろうけど、切り離れた部位は消えるのか、それとも残るのか。

何か刃物はないかと部屋を漁っていると、いつのまにか目の前に包丁っぽい刃物が落ちていた。

ちょうど良かったので、それを右手で刃物をもって勢い良く振りかぶり左手を切ろうとしたその時

ガチャリと部屋の戸が開いた。

「……………ちよっ!! お前なにをしてるんだああ——!!」

「クラン!?!」

「ホワツ!?!」

え!?! ちよ、誰?

紫色の吸血鬼は誰だかしってるけど確か姉と紹介された吸血鬼だ。だがもう片方は知らない吸血鬼だ。

赤っぽい髪色をしている、姉（仮）より、私より身長は高く、外傷は見られないが中がボロボロだった。

戦闘後なのだろうか？ 吸血鬼の特性である治癒能力によって痛

覚には鈍感ではあるが、流石にあれは痛いのでは無いだろうか？  
着ている服もボロボロだし。

おっと、考えが逸れた。

コイツが危険な人物なのかどうか、そこを見極めなければ。

私は相手をジツと見る。

相手は何か慌てている様子だ。

何か、あるのか？

やはり怪しい、何かあるんじゃないのか。

ただ私は相手のことをジツと見るだけだった。

◆◆◆

俺はレミリアと共に先程の部屋の前まで戻ってきていた。

あの後に随分とレミリアに叱られてしまった。

でも少し良かった。何がどう良かったのかは言わないけど、良かった。  
た。

おっと考えが逸れた。

ヴィゴレは真面目に部屋の番をしていたのか

ドア横の壁に背中を着けて立っていた。

俺が帰ってきてても何も言わない。

何か少し喋れば良いものを、ここまで来る間はピーチクパーチク  
喋っていた癖に。

寝てんの？

とりあえず、どうにもしようがないからドアを開け中に入ると、目  
を疑う光景がそこにあった。

なんと弟が自身の腕を切ろうとしているのだ。

「……………ちよっ!! お前なにをしているんだああ——!!」

驚きの余り大声を出して叫んでしまった。

部屋の外に居るヴィゴレがビクツとしていた。

いや、起きてるならさつき何か言えば良かっただろうが。

「クラン!？」

レミリアも俺同様、動揺して弟の名前を叫んでいた。

ダジャレじゃないぞ。

「ホワツ!？」

おい、何がホワツ!? だよ。

こつちが言いたいわ!!

マヌケナ声を出して、こちらをジツと見だした。

え? 何? 何で俺のことを見てる訳?

俺の顔に何か付いてるのか? いや、何かは付いてるんだろうけど、血とか。

いやいや、お前冷静っぽい感じだしてるけど頭が可笑しいことしてるからな!?

俺が慌てているにも関わらず、それでも尚こちらをジツと見続けたる頭がおかしい弟。

もう、何なのコイツ。嫌だ、もうお家に帰りたい。

家、ここだけさあ。

ジツとこつちを見てきた弟に動きがあった。

何と腰を落とし、包丁を両手で持ってこちらに突撃してくるではないか。

あー、これ見たことあるわ。

あれだ、昼ドラだ。

弟君は『貴方を殺して私も死ぬ!!』と言わんばかりの体勢でこちらに突撃してきており、その後ろには殺害ヤンデレ嫁のスタンドが見える。

あれ? 俺の目、可笑しくなったのかな。

何か見えてるんだけど。ええ、あれ何だよ。

不思議なパワーにでも目覚めたのか?

嫌だ、こんなのに殺されたくない。

何か俺の体動かないし。

あれ? 俺、怖いのかな。全然体が動いてくれない。

人生、生きてきた中で一番怖がつてる気がする。

レミリアも同様なのか俺の腕に引っ付いてプルプルしてる、何これ可愛すぎる。

そんな馬鹿みたいなことを俺が考えている間にもジョジョが、違っ

た。徐々に近づいてくる。

そして俺は腹を刺されて、血を噴出するものかと思いきや、転けた。何が転けたのか、弟クランが思いつきり転けた。

効果音を着けるとすれば、ズテ——ンツだ。

それほど勢いよく見事に転けてしまった。

一番の見せ場で転けてしまった。

何か本人プルプルしてるし、うん。

恥ずかしいんだろうな。

そらそうだろうよ、あれが恥ずかしくないわけない。

力を暴走させていきなり素早く動ける訳がない。

少しの間、レミアアとその様子を見守っていると振動が止まった。

そして止まったと思いきや、いきなり髪が変色しだした。

「つて!!.. おい!! 恥ずかしいからって力を使おうとするな!!」

弟の両方を両手で掴み、思いつきり前後にガクガク揺らすと、髪の色の変色が止まり色が元通りに戻っていく。

「あうっ、あうっ、ちよっ、やめっ、て……」

何か言っている気がするが、きつと気のせいだろう。

気のせいだろう。

先程までの八つ当たりだとか、嫌がらせだとかそういうんじゃない。決してそういう訳じゃないんだ。決して!!

「あうっ、あうっ、あ、うっ、あ」

あ？

あれ？ 何か様子が？

髪の毛がドンドン赤黒く染まって行って、あれ？

ヤバくない??

それでもガクガクするのを止めない。

「やめ、やめ、やめ!!.. ガツグウ!!」

ありや??

羽がドンドン歪な禍々しい形に変形して行って？

何か、駄目だな疲れてるんだな。

テンションが可笑しいことになってるし、今の状況に対しても何も



思わない。

「止めろつつてんだろうがア!!」

俺の腕を振り払うと、後ろの方に後退していく。『弟らしき者』

「ハアハアハア、ング。お前マジで何なんだよ!! 何のために俺の肩を掴んで揺らしてるんだよオ!!」

「だって、なあ?」

「分からねエよ!!? お前が言ってることは何一つ分からねエよ!? なあ? だけで伝わってたら人生誰も苦労しねエぞ!?!」

何か人生について説教されてるんだけど。

そんなの元オタクの俺にも分かってるよ。

なあ? だけで伝わったらコミュ症になってないからな。

同士達には伝わるけどね。

昔にこんなことがあった。

『なあ?』

『何だよ』

『やっぱりだよなあ?』

『そうだなあ?』

『やっぱりだよなあ?』

『なあ?』

『なあ?』

『なあ? なあ?』

『なあー!!』

みたいな馬鹿みたいなことがあった。

フツ、もう会えないんだな。

あれ? 何か涙が。

「お前、マジで何なんだよオ———!!」

ああうん、何かゴメン。

少し時間が経過

やっと落ち着いてきたのか、こちらを睨むだけになっている。そんなに見られると照れるなあ。

「クソツタレエ、せつかく出てきてやったってエのによオ？ 何なんだよ、何なんだよ」

「せつかく？ 何か話でもあるのか？」

「普通はよオ、もつとシリアスになるところじゃねエのか？」

「何でだろうな、何かテンションが上がっちゃって、何かゴメンな？」

「チツ、もういい。それで、お前が『俺に』聞きたいことがあるんじゃないのか？」

「ああそうだな、話を聞かせてもらう」

先程までのふざけた態度は俺にはなく、真剣な雰囲気を出している。

「ああまづはだな——」

そう言つて、話を始める。

三時間程たった頃に話は終わり、俺は深く考え込んでいた。

「はあ、本当にそうになっているとはな、最悪の結末、いや、まだマシな方だな」

最悪、地球は消えて無くなっていたかもしれないのだから。

「さて、俺の話は終わりだ。後は俺じゃなくて、コイツに聞かせろ。じゃあな」

フツと頭を落とし、髪の色が元通りになっていくのを確認して、弟が目覚ますのを待つ。

翼が元通りになった頃合いに目を覚ました。

辺りを見回し、こちらを見てくる弟君はどういうところを言うのだろうか。

「ああ、えーと、なんだ。とりあえずお前は誰だ」

まあそう来るよな。

「俺はお前の兄だ」

「俺の兄、ねえ。それにしても似てないんじゃないのか？ そもそもどうしたら私とこの二人、そしてお前との身長の違いがこれだけあるんだ？ お前は何年生きてる、そこまで成長するには400年500年じゃ到底無理な話だ。吸血鬼はどれだけ長い年月を生き、どれだけ血を啜ったかによつて力が強いか変わるって聞いたんだが」

そういうことか、何でそんな話をしてきたのかと思えば、あながちそれも間違いではないけど。

「まあそうだな、一々年を数えないよ。血なんて反り血で十分だしな。これで満足か？ 一々覚えてられない。分かったな？」

「まあ、良いか。俺は何故ここに居て、記憶がない？ そして俺は誰だ」

「さてよ？ それは確か」

「レミリア、アイツはちゃんと自分が誰だか知ってるんだろ？」

「うん、母さまが教えたと思うけど」

「つまりは、再確認。」

「ちゃんと俺が答えられるか、それを問いかけてる訳か。」

「分かった、全部話そう。だが長くなるぞ」

「良い、話してくれ」

「分かった、まずは何故お前がここに居て、尚且つお前が誰なのか、それはお前が克蘭・スカーレットという名前のスカーレット家次男だからだ」

「話してみるが、別に何も行動は起こさない。」

「記憶がないのは何故か、これが本題だ。そうだろう？」

「そうだ」

「お前の記憶喪失の原因は、お前自身の能力のせいだ」

「俺の能力？」

「ああ、たまに居るんだ能力を持って産まれてくる生命が。人間にも居るらしいが、今はこの話は良い。お前の能力だが、詳しくは俺もよく分からないが、言うなれば『ありとあらゆるものを創造をする能力』だ」

「なんだ、その能力は。破格の能力じゃないか」

「因みにそのベットに寝ているフランの能力は『ありとあらゆるものを破壊する能力』これも未だにどこまでなのか検討がつかない」

「なるほど、もしかして私とその娘は双子なのか？」

「そうだけど」

「なるほど、陰と陽の関係か？ バランスを取るために、切り離された

？ 分裂した？」

何かブツブツ言ってるな。

「話を続けるぞ？」

「ああうん、続けてくれ」

「続けるぞ、正直に言ってお前の能力については何も分かってない。だが1つだけ確かなのは、お前の中にもう一人、居ることだ」

「もう一人？ 多重人格ってことなのか？」

何故、そういう知識があるんだ。

「まあそう考えてもらって良い。さっきまでそいつと話してたんだが、能力について話を聞いた」

「……………」

「お前の能力は1つじゃないらしい」

「俺の能力が1つじゃない？」

「そうだ、これは珍しい、あまり事例がない。

そいつ言うにはお前の能力は、フランの能力の絞りカスのようなものが入っているらしい」

「つまりは『破壊する能力』か」

「そうだ、フランにもお前の能力が入り込んでいる。その能力だが、お前の記憶を破壊したらしい」

「は？ つまり自爆能力ってこと？」

「間違いじゃないな。物を壊そうとしても何も壊せないらしい。精々自分の手足を吹っ飛ばす程度らしい」

「嘘だろう、何時使い道があるんだよ。吸血鬼にその能力は入らないぞ」

「しかも、吹っ飛ばしたところは回復速度が遅くなるっていうおまけ付きだ」

「使えねえよ!？」

「正直に言って使えない、だがそれのお陰で助かったらしいぞ？」

「どういうことだ？」

レミリアのことが突然気になったので、レミリアの方を見ると、眠っているフランの横に座っていた。

やはりフランも、疲れてるのか。

「それで続きだが、その破壊の能力でお前の感情が破壊されたらしい」「感情が破壊？　なんだそれ？」

「おれに聞かれても詳しくは分からない、俺は聞いたただだからな。それで感情が全て破壊されて、残されたのは狂気のみという悪質なこ  
とになってる」

「なんというか、酷いな」

「酷いな、それでお前が無意識的に生き残るためにした行動は、もう一人の自身を創ることだったらしい」

「なるほどな、それでソイツが全面に出てきたお陰で何とか助かったっていうことか」

「まあ、そうだな」

「でも、話を聞く限り、ソイツは前から私の中に居たみたいな話し方だな」

「確かに、そうだな。どちらにしろ俺には分からない話だ。これについては本人に聞くしかないからな」

「まあ、分かった。お前の言っていたことは信じることにする」

「そうか」

「信じるに当たって、やらなきゃ行けないことがある。そうだろう？」

「そうだな、この話を信じるならばお前の能力をどうするか、自身の危険は取り除いておきたいだろうしな」

「それで、だが。ずっと考えていたんだが、能力の暴走には何か切っ掛けがあるんじゃないのか？」

「多分だが、あるだろうな。常に暴走してた訳じゃないからな」

「恐らくだけど、俺とその妹の関係性、双子っていうことは離れちゃ行けないとかじゃないのか？　私も良く分からないけど」

「つまり？」

「どこかに閉じ込めた方が良いつてことだな」

つまり、フランと会えなくなる!?

待て待て待て!!　そ、そんなのあり得るのか!?

駄目だろ!?!　駄目に決まってるじゃないか!!

いや、でもフランの為にはお兄ちゃんが我慢しなければ、フランが死んでしまつてはそれこそ駄目だ。

「分かった、そうしよう」

「ありがとう、あと1つだけ聞いて良いか？」

「何だ？」

「お前の能力は何だ？ それによつてはお前の妹に会えるかも知れないぞ？」

「俺の能力は『ありとあらゆるものを抑制する程度の能力』だけど」

「なるほどな、それで外に居るやつは能力は？」

「確か、『ありとあらゆるものを増加する程度の能力』だつたと思うけど」

「分かった、ならその外に居るやつは俺達に近づけさせるな。何が起ころか分からない、お前なら能力を使つてくれれば俺達も能力を暴走させなくて済むし大丈夫だろうけど」

「本当か!？」

「うるさい、次はどこに閉じ込めておくか。あまり日光があるところは駄目だからな、何処か地下とかが良いかも知れない」

「それならこの紅魔館の最深部の地下に部屋がある。それでも、牢屋みたいな所だけだな」

「ふむ、なら一番マシな部屋で良いだろう。この娘もまだ子供だし、吸血鬼だからって流石に汚いところには住みたくないだろうしな」

「分かった」



数時間後、連れ込まれたのは、ぼんやりとした如何にもな雰囲気を感じ出している地下であった。

何というか、趣味が悪い気がするな。

「この部屋が多分一番綺麗だな、一度も使われたことない部屋みたいだ」

「ありがとう、館の修復は能力が使いこなせ次第に手伝わせてもらおうよ」

「ああ、それは有り難いな。あの館を修復するには手間が掛かりそう

だ」

「それじゃ」

「ああじゃあな」

そして俺はその後、何百年との付き合いになる部屋に未だに目覚めない妹を抱え入って行った。